

修士課程における公衆衛生看護診断論・演習プログラムの評価 —公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラムに照らして—

二宮一枝（岡山県立大学保健福祉学部看護学科）

要旨： 看護師免許を有する修士課程の保健師学生が、公衆衛生看護診断論・演習として、包括3職種のスタッフと協働して年間6回の認知症カフェを企画・運営した。6回目は全てを責任をもって企画・運営でき十全的参加であった。引継ぎ資料からみた自己評価では、公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラムの「A-4 コミュニケーション能力」「A-5 協働する能力」「C-5 公衆衛生看護マネジメント」「D-3 地域社会での最小単位としての個人/家族への支援に必要な基本的知識・技術」を評価していた。反省会後の振り返りでは、「A-1 プロフェッショナルリズム」、「A-2 公衆衛生看護学の知識と課題対応能力」、「A-3 公衆衛生看護実践能力」も確認でき、「A 保健師として求められる基本的な資質・能力」を修得していた。看護師免許を有する自覚と責任から、指導者の指導下で住民が学生にケアを委ねることが可能な状況を創出し、地域貢献に寄与できた。

キーワード：保健師教育 修士課程 公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム
認知症カフェ

1. はじめに

2011年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正では、保健師国家試験受験資格に必要な修業年限延長と単位数増のみでなく、保健師教育課程の基盤となる学問名称が地域看護学から公衆衛生看護学に変更された。多様な保健師教育の質を保つため、2010年に厚生労働省が示した「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度（以下、卒業時到達度）」⁷⁾を用いた先行研究では、看護系大学等4年間で看護師と同時に保健師国家試験受験資格を取得する統合カリキュラムによる卒業時到達度は、教育機関によって差があり、十分ではないことが報告されている¹⁴⁾。一方、2011年度から始まった大学院における保健師教育で

は、教育内容の特徴^{3) 5) 9)}や修了生の高い実践能力^{6) 15)}などが報告されている。

全国保健師教育機関協議会は、保健師教育課程の基盤となる公衆衛生看護学としての教育評価等に参照すべきツールとして「保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ（以下、MR）」⁴⁾と公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム（以下、保健師コアカリ）¹⁶⁾を提示した。保健師コアカリ¹⁶⁾では、保健師に求められる基本的な資質・能力としてプロフェッショナルリズム、コミュニケーション能力、協働する能力等が明示された。学生の卒業時の質を保証するためには、保健師のアイデンティティを持ち、保健師として「保健指導」できる知識・技術の基礎を習得できる標準化された課程と

卒業時の到達目標を達成できる教育体制が必要である¹²⁾。特に、社会の変化が速く、保健福祉政策・制度の改正に伴う保健師の業務拡大には、挑戦と応用力を必須とするため、「保健師とは何か」というアイデンティティに基づいたプロフェッショナルリズムの育成が重要である¹³⁾。

しかし、アイデンティティに基づいたプロフェッショナルリズムも含めて、保健師コアカリ¹⁶⁾に関する保健師教育の報告は十分ではない。本学では、2017年度の公衆衛生看護診断論及び同演習として、地域包括支援センター（以下、包括）との協働で、コミュニティを基盤とした参加型リサーチによる認知症カフェプログラム（以下、プログラム）を開発した。5回目までの評価を卒業時到達⁷⁾及びMR⁴⁾に照らして、アセスメント力と当事者グループ支援能力は2回目～3回目で修得し、4回目～5回目でスキルとアイデンティティを含めた学修の深化により、グループ支援のコンピテンシーとケイパビリティを確認した。さらに、状況的学習における正統的周辺参加⁸⁾から、その都度生起する役割を通じて知識の再構成やアイデンティティ等を含む成員性を身につけていくプロセスを明らかにした¹⁰⁾。しかし、十全的参加⁸⁾に設定した6回目の評価と保健師コアカリ¹⁶⁾の観点からの検討が残されている。

そこで、本稿では、6回目の十全的参加⁸⁾を分析し、プログラムを用いた修士課程における保健師教育の公衆衛生看護診断論・演習について保健師コアカリ¹⁶⁾の「A保健師として求められる基本的な資質・能

力」の修得を評価することとした。分析には、当該科目履修の1年次生（以下、M1）3名の振り返り記録とM1が次年度学生への引継ぎ資料として作成した「平成29年度認知症カフェ 施策と運営のポイント」等の実践資料を用いた。なお、本学倫理委員会の承認を得て実施した（受付番号17-07）。

2. プログラムの概要

1) 保健師コアカリとしてのプログラム

看護師免許を有し、修士課程のうち保健師国家試験受験資格取得を希望する学生を対象に、プログラムを用いて公衆衛生看護診断論・演習を通年に開講した。プログラム開発は、大学所在地を所管する包括の保健師の要請に端を発している。背景には、総社市の認知症カフェ開設の助成条件の1つとして、有資格スタッフの確保があった。包括職員及び保健師経験を有する教員の指導のもと、看護師免許を有する学生はスタッフとして、正統的周辺参加から十全的参加をめざすことを、包括、教員、M1の3者が共通認識し、全体計画を企画・実施した。大学側としては、公衆衛生看護実践能力に必要な継続的支援の体験が、5単位の実習では担保できないことや大学の地域貢献の点からも協働することとした。また、包括との協働の意義は、包括が担当する日常生活圏域内で、包括の3職種（保健師・社会福祉士・主任介護支援専門員）と共に年6回、認知症の当事者・家族を対象とするグループ支援を企画・運営することにある。なお、グループ支援は、保健師コアカリ¹⁶⁾では、4つの公衆衛生看護の対象、即ち「地域社会での最小単位としての個人/家族」「生活基盤としての地区/小地

域」「地域の住民組織/地域組織」「地域の制度や仕組みを構築する社会や組織」のうち、個人/家族を支援する際の方法・技術と捉える。

以上のことから、保健師コアカリ¹⁶⁾からみたプログラムのねらいは、「生活基盤としての地区/小地域」における、「E-3-5) 認知症を持つ人々の健康への支援」に焦点化して、「D-3 地域社会での最小単位としての個人/家族への支援に必要な基本的知識・技術」を学修することにより、総合的かつ基盤となる「A 保健師として求められる基本的な資質・能力」、即ち、「A-1 プロフェッショナルリズム」、「A-2 公衆衛生看護学の知識と課題対応能力」、「A-3 公衆衛生看護実践能力」、「A-4 コミュニケーション能力」「A-5 協働する能力」を修得することである。その到達度は「説明できる」「参画できる」「提供できる」と幅があり、「A-3 公衆衛生看護実践能力」では、①「小地域の健康課題に対して、地域住民や関係機関と協働して地域活動に参画できる」②「健康課題解決のための、事業化施策化について説明できる」③「公衆衛生看護活動を全体的に総合的な視点で理解し、根拠に基づいた公衆衛生看護実践を自身の責任と能力の範囲で提供することができる」となっている。

2) 2017年度 認知症カフェプログラムの実施概要

公衆衛生看護診断論・演習として基本的な講義とガイダンスの後、本学実習室を会場に隔月に定例開催することとした。毎回、包括3職種・教員とM1の3名は、開催1週間前に打ち合わせし、当日の運営にあたる。M1は、打ち合わせと反省会の議事録

を作成し、教員及び包括が確認し、加筆修正した。この間に、M1は既存資料分析と並行して地区踏査を行い、その成果は第2回岡山県地域包括ケアシステム学会学術集会で発表した。

対象者への呼びかけは包括が行い、参加者には次の開催チラシを配付し、駐車許可証とした。但し、予約制ではないため、参加者は流動的であるが、当事者1名と介護者の会1名は毎回参加していた。開催回によっては、ゼミとしてM2や学部生、実習生の参加や報道関係者の取材もあった。6回目の企画は前回同様の流れ¹⁰⁾で、5回分の写真を編集したビデオを放映し、参加者は写真立てをつくることにした。

6回目の打ち合わせでは、1年間の評価として、教員から5回までのM1の学びの要約を報告して意見交換し、実践報告書を作成することとした。また、次年度の計画を立案し、包括職員と一緒に当事者宅に次年度案内を配布した。さらに、M1は、1年間の振り返りをまとめ、次年度の新M1への引継ぎ資料(表1、2)を作成した。

3. 結果

1) 6回目の学修

2018年2月に実施した6回目のプログラムにおけるM1の振り返り記録を「斜字」で抽出し、(番号)を付した。

(1)「今までも主体的に行うことを意識していたが、今回は学生主体で企画から全ての運営を行うことは、初めての経験」であると意識していた。(2)「今までは参加者一人一人と関わる事に自分の意識があり、ゆっくり関わりができていた」が、今回は(3)「全体を動かす立場では時間管理も重

要]なので、(4)「一人一人と関わること」、(5)「日常生活のことなど深く話すこと」が難しく、(6)「個別に関われなかった人が出た」。特に、反省会で包括スタッフ・教員の発言から、(7)「参加者同士の関係性が良くなっているということに気づけなかった」とわかり、(8)「会を進行しながら個人と関わる中でも他の方がどのように動いているのかといった全体を把握する」ことは(9)「必要なスキル」であり、(10)「保健師としての自分の課題」なので、(11)「全体を見るスキルを培っていきたい」と考えていた。(12)「反省会でその人たちの様子も聞くことができて良かった」こと、(13)「全体を見ていたつもりでもまだまだできていなかったなと感じ、集団を対象にしているため、もっと周りのことに敏感に反応したり、観察できるようになりたい」と意欲的であった。

また、参加者の変化を継続的にとらえ、(14)「最初は、傍から作業を観察するなど介護者グループとも距離があった参加者に、意識して関わったが、(今回は)他の参加者に介護に関する相談もできていた」ことを確認できていた。(15)「介護者同士でお互いにアドバイスをする様子や当事者同士が互いに励まし合う姿が見え、回を重ねるごとに参加者のつながりは深まってきていること」から、(16)「これまで続けてカフェを行ってきたことの意味」を評価し、(17)「認知症カフェとして機能している」と実感していた。さらに、(18)「今後の課題として、女性介護者が、当事者の付き添いではなく、介護者自身の悩みや相談事を解決できる助けとなるように環境を整えていかなければならない」ので、(19)「そのため

にも保健師として『個から集団、集団から個』という意識を常に持って地区診断や事業を行う必要性」や、(20)「個または集団のニーズを把握し、必要な人やサービスと繋げていかなければならない」と考えていた。

さらに、(21)「会全体を動かすことの難しさ」を痛感していた。それは、(22)「時間の管理」だけでなく、(23)「当事者、家族、地域の方など様々な状況の方がいる中で、参加者全員にわかりやすく説明することへの配慮」や(24)「参加者の反応をきちんと把握して、会の流れに反映させていくことも必要」であり、(25)「どうすればスムーズに写真立て作りが行えるか、楽しく、落ち着いた空間を作れるか」(26)「運営側として、参加者にとって有意義な時間となっているだろうか」と(27)「考えなければならない点が多くあり、運営の難しさを感じた」。そして、(28)「予定より早く終わってしまい、最後の区切りもあまり良くなかったのではないかと感じていたので、最後まではっきり自分なりによかったとは思っていなかった」が、反省会のコメントから(29)「参加者の様子を聞く中で、自分が思っていたよりも良い効果があったことを知り、少し安心」し、(30)「5回までと同じような雰囲気のできた事を評価することも大切」とわかった。

(31)「1年間スタッフとして企画や運営まで授業の中で経験でき、実習さながらの貴重な経験」から、(32)「保健師としてカフェ全体を動かすこと、個人と関わること、個人と個人をつなげることができれば、参加者同士のつながり深まり、困ったときに助けを求める場の一つになるということ」を学ぶことが出来た。(33)「保健師として

必要な視点を地域住民との関りを通して学べる貴重な機会」を得て、(34)「今回の経験を活かし、自分自身の実習や就職後の保健師活動の実践につなげていきたい。」と考え、カフェの今後の課題として(35)「参加者の拡大と参加者個々の目的や違いに対応すること」をあげつつも、(36)「良い部分は継続しながらカフェが続いていけば良い」と記述していた。

2) 引継ぎ資料からみた学修成果

M1は、次年度の新M1に引き継ぐための資料として「H29年度 認知症カフェ施策と運営のポイント」(表1、2)を作成し、2018年度はTAとして、ガイダンスを行った。認知症カフェについて国・市の政策と包括の活動計画における位置づけをふまえ、保健師コアカリ¹⁶⁾のうち、A-4 コミュニケーション能力、A-5 協働する能力、C-5 公衆衛生看護マネジメント、D-3

地域社会での最小単位としての個人/家族への支援に必要な基本的知識・技術について記載されていた。また「全体を見ながら臨機応変に関わる」「自分も楽しむ」など、体験からの留意点の記載もあった。

4. 考察

本稿の目的は、6回目の十全的参加⁸⁾を分析し、プログラムを通じて保健師コアカリ¹⁶⁾の「A 保健師として求められる基本的な資質・能力」を修得できたかについて明らかにすることであった。

まず、自己評価(表2)では、保健師コアカリ¹⁶⁾のA-4、A-5、C-5、D-3を評価していた。C-5とD-3は、A-3に包含されるので、A-3の下位の学修目標毎にみると、①「小地域の健康課題に対して、地域住民や

関係機関と協働して地域活動に参画できる」②「健康課題解決のための、事業化施策化について説明できる」③「公衆衛生看護活動を全体的に総合的な視点で理解し、根拠に基づいた公衆衛生看護実践を自身の責任と能力の範囲で提供することができる」を満たしていた。特に、③の「総合的視点」としては、公衆衛生看護が、個別ケアをしながら社会の健康づくりを行うという看護の特徴¹⁾から、保健師特有の視点として「個から地域」³⁾を重視していることに着目したい。振り返りでは「会を進行しながら個人と関わる中でも他の方がどのように動いているのかといった全体を把握する」(8)ことが、保健師としてのスキルで研鑽すべき課題(9～11)と捉えられていた。加えて(18)「今後の課題として、女性介護者が、当事者の付き添いではなく、介護者自身の悩みや相談事を解決できる助けとなるように環境を整えていかなければならない」ので、(19)「そのためにも保健師として『個から集団、集団から個』という意識を常に持って地区診断や事業を行う必要性」や、(20)「個または集団のニーズを把握し、必要な人やサービスと繋げていかなければならない」と考えていたことから、保健師特有の視点は取得できていたと考える。

さらに、参加者への配慮など多くのことを考え(23～27)、認知症カフェ企画の運営のポイント・留意点(表2)にも「雰囲気大切に」など、スタッフとしての自覚と責任から、適切な評価をしつつ潜在する様々な課題の発見と解決への努力が見られた。これらのことから、A-1、A-2、A-3を修得できていたと考える。

次に、アイデンティティについて述べる。アイデンティティは保健師の基本的能力の核をなし、学生は保健師としての専門性を高めることを自覚し、保健師という専門職になること、その仕事をすることに意味を見出すことができるレベル¹¹⁾とされる。先述のとおり、4回目～5回目でスキルとアイデンティティを含めた学修の深化により、正統的周辺参加⁸⁾から、その都度生起する役割を通じて知識の再構成やアイデンティティ等を含む成員性を身につけていた¹⁰⁾。6回目では、1年間スタッフとしての企画・運営(31)により、保健師として必要な視点を地域住民との関りを通して学び(32、33)、この経験を活かし、実習や就職後の保健師活動の実践につなげていきたい(34)と明記されていた。このことから、学生として求められるレベルに達し、十全的参加⁸⁾に至ったと考える。これらのことは、平野²⁾が指摘したように、保健師基礎教育では、保健師に必要な気質の育成、個々の住民に着目した支援の重要性、地域をみることができる洞察力の養成、行政特有の機能とシステムの理解の修得が重要であるということに連なる。そして、修士課程の保健師教育の特質として、看護師免許を有する学生であることから、学生自身にケアの責任者としての自覚が芽生えるほか、指導者の指導下のもと住民が学生にケアを委ねることが可能な状況を創出できること²⁾も確認できた。

5. 結 論

看護師免許を有する修士課程の保健師学生が、公衆衛生看護診断論・演習として、

包括3職種のスタッフと協働して年間6回の認知症カフェを企画・運営した。6回目は全てを責任もって企画・運営でき十全的参加⁸⁾となっていた。引継ぎ資料からみた自己評価では、保健師コアカリ¹⁶⁾の「A-4 コミュニケーション能力」「A-5 協働する能力」「C-5 公衆衛生看護マネジメント」「D-3 地域社会での最小単位としての個人/家族への支援に必要な基本的知識・技術」を評価していたが、反省会後の振り返りから、「A-1 プロフェッショナリズム」、「A-2 公衆衛生看護学の知識と課題対応能力」、「A-3 公衆衛生看護実践能力」の達成も確認でき、「A 保健師として求められる基本的な資質・能力」が修得できた。

さらに、看護師免許を有するスタッフとしての自覚と責任から、指導者の指導下で住民が学生にケアを委ねることが可能な状況を創出し、地域貢献に寄与できた。今後は単位取得後も、実習やTAとしての参加による学修の深化が期待できる。

謝辞

総社市東部北地域包括支援センター、介護者の会、参加者の皆様方はじめ、多くの関係者の方々に、感謝申し上げます。

文献

- 1) 麻原きよみ(2014) 公衆衛生看護とは。(麻原きよみ、公衆衛生看護学原論、pp. 1-13. 医歯薬出版) .
- 2) 平野美千代、佐伯和子、上田 泉他(2012) 行政機関の保健師に求められる政策に関する能力と必要な保健師基礎教育の内容：市町村に勤務する保健師管理者への面接調査から日本公衆衛生雑誌、59(12)、871-

878.

- 3) 平野美千代、佐伯和子、本田光他 (2017) 実習施設との協働による実践能力向上を目指した修士課程における公衆衛生看護学実習構築のプロセス：学士課程をもとに再構築した実習、日本公衆衛生看護学会誌、6 (3)、288-296.
- 4) 保健師教育検討委員会 (2016) 保健師教育におけるミニマム・リクワイアメンツ全国保健師教育機関協議会コンパクト版.
- 5) 蔭山正子、永田智子 (2016) 研究的思考・手法を実践に活用する能力を養う 東京大学大学院修士課程における保健師実習、保健師ジャーナル、72 (6)、450-455.
- 6) 川本晃子、河村真紀代、野口久美子他 (2010) 【修士課程における保健師教育必要性和育成像】私の行なった修士課程での保健師実習 M 町における地域診断・活動展開実習を通じて学んだこと M 町で保健師が住民と育てた介護予防教室を通して地域特性に合わせた支援を考える、保健の科学、52 (4)、41-245.
- 7) 厚生労働省 (2008) 保健師教育の技術項目と卒業時の到達度について <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/04/dl/s0428-8m.pdf> (2019 年 1 月 18 日検索可)
- 8) Lave, J. Wenger, E. (1991) 佐伯胖訳 (1993). 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加、産業図書.
- 9) 村嶋幸代、赤星琴美 (2016) 在宅・地域志向に対応した医療介護関係者の人材育成教育の動向 (第 2 回) 保健師の基礎教育・アドバンス教育 地方創生に不可欠な人材として力を発揮するために、保健の科学、58 (2)、115-120.

- 10) 二宮一枝 (2018) 保健師教育における状況的学習を用いた認知症カフェプログラム評価 (第 1 報) 岡山県立大学教育研究紀要 2 (1)、113-124.
- 11) 岡本玲子 (2015) 保健師のコアコンピテンシー. (麻原きよみ、公衆衛生看護学原論、pp. 87-98. 医歯薬出版) .
- 12) 佐伯和子 (2017) : 新しい公衆衛生看護学教育の基盤を固めるために—健康格差の拡大と医療制度改革を背景として—、保健師教育、1、2-7.
www.zenhokyo.jp/org/doc/public-health-nursing-education-vol01-no01.pdf (2019 年 1 月 18 日検索可)
- 13) 佐伯和子 (2018) 保健師教育のカリキュラム構築、保健師教育 2 (1)、2-9.
www.zenhokyo.jp/org/doc/public-health-nursing-education-vol02-no01.pdf (2019 年 1 月 18 日検索可)
- 14) 鈴木良美、斉藤恵美子、澤井美奈子他 (2016) 保健師選択制導入前後における学生の技術到達度と実習体験に関する評価、日本公衆衛生雑誌、63 (7)、355-366.
- 15) 山名由希子、石川志麻、有本梓他 (2010) : 【修士課程における保健師教育必要性和育成像】私の行なった修士課程での保健師実習 O 市における地域診断・活動展開実習 保健師の高齢者筋トレグループ活動に対する自主化および継続支援、保健の科学、52 (4)、246-250.
- 16) 全国保健師教育機関協議会 (2018) : 公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム (2017)、
<http://japhnei.umin.jp/doc/core-curriculum-2017-houkoku-2.pdf> (2019 年 1 月 18 日検索可)

表 1. H29 年度認知症カフェ：施策と運営のポイント（M1 作成、著者改変）

<p>H29 年度認知症カフェ：施策と運営のポイント</p> <p>1. 施策</p> <p>①国の施策における認知症カフェの位置づけ（新オレンジプラン7つの柱）</p> <p>②総社市高齢者福祉計画・第6期介護保険事業計画における認知症カフェの位置づけ評価</p> <p>③H29 年度東部北地域包括支援センター活動計画における「よらーれ」の位置づけ</p> <p>2. 認知症カフェ開催を通しての学生の学び（表2）</p> <p>3. 認知症カフェ企画の運営のポイント・留意点</p> <p>★初めて来た人は一人にせず、なじめるように関わる</p> <p>★全体を見ながら臨機応変に関わる</p> <p>★「認知症」ということを意識し過ぎず、カフェの雰囲気を大切にする（飲み物の提供など）</p> <p>★季節の雰囲気を大事にする（企画や歌に関して）</p> <p>★自分自身も楽しむ</p>

表 2. 認知症カフェ開催を通しての学生の学び；公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム 2017 に沿って (M1 作成抜粋)

項目	ねらい	実 際	まとめ
A-4 コミュニケーション能力	・個人、家族、多様な組織と信頼関係を構築し、直接的・間接的な支援を行う	・当事者、家族との対話や、当事者と介護者のグループ別で話をする場に毎回入った。	・個人と関わりながら、その人の家族や地域での生活に視点を向け、対象理解を深める。
A-5 協働する能力	・保健・医療・福祉・介護・教育等の領域において、ケアの受け手やその関係者及び関係機関の役割を理解し、協働で活動を行う。	・現在介護を行っている人や介護経験のある介護者の会の方、今後カフェを開催する予定の方々がカフェを通して、繋がりが持てるように話題提供をした。 ・学生と専門職、地域住民がカフェを通して関わる事が出来た。	・カフェに参加した目的の違いや個々の役割の違いを理解し、保健師として関わり、参加者・スタッフ全体と協働することが重要である。
C-5 公衆衛生看護マネジメント	・公衆衛生看護の支援過程において、目標を達成するために必要なタスクを細分化し、時系列で役割や責任を明確化し、必要な予算・人・物を調達し、メンバーを管理調整していくマネジメントについて学ぶ。	・事前準備から当日の計画・議事録作成・運営を行った。 ・包括の方に予算の調達方法や使い道を教わり、購入物品の検討を行った。	・包括の方と相談しながら計画や流れを決め、議事録にすることで、反省点などが明確になり次回に活かすことが出来た。 ・会の運営には人・物・金が必要だということを学んだ。
D-3 地域社会での最小単位としての個人/家族への支援に必要な基本的知識・技術	・地域で生活する個人/家族の生活と健康を多面的・継続的に情報収集し、対象者を取り巻く環境も含み、対象の力量をアセスメントし、対象者が主体的に健康課題を解決するための支援計画の立案・実施・評価を行うための基礎的知識と技術を学ぶ。	・1年間の認知症カフェを通して、当事者、家族からその時期の生活の様子や、困りごとを会話の中で継続的に聞いていくことで、認知症カフェが1つの相談の場・居場所となった。 ・家庭訪問を行うことで、対象者の生活の場や、社会資源の利用の情報を得た。	・継続的に当事者やその家族と関わることで、参加者の行動意欲や相談行動の変化を見ることが出来、継続的に関わる事の大切だということを学んだ。 ・訪問を通して、対象理解が深まった。

Evaluation of the public health nursing assessment (seminar) program in masters' courses: From the viewpoint of the Public Health Nursing Education Model Core Curriculum

Kazue Ninomiya

Department of Nursing Faculty of Health and Welfare, Okayama Prefectural University

Abstract:

Student public health nurses in masters' courses with nursing certification planned and managed a café for dementia patients six times a year in collaboration with public health nurses, social workers, and care managers as part of the public health nursing assessment (seminar). In particular, the students fully planned and managed the sixth café, and were completely responsible for running it. According to their self-assessment documents, they were able to improve the following abilities and skills: "A-4 communication skills", "A-5 collaboration skills", "C-5 public health nursing management", and "D-3 basic knowledge/skills required to provide support for individuals/families - the smallest unit in the community" - assessment items of the Public Health Nursing Education Model Core Curriculum. Following an evaluation meeting, the students were able to review "A-1 professionalism", "A-2 knowledge of public health nursing and skills required to address problems", and "A-3 skills required to implement public health nursing", and confirmed that they had learned the "A basic qualifications/abilities required for public health nurses". The students contributed to the community as aware and responsible certified nurses in that they, under the guidance of supervisors, were trusted by community residents as reliable care providers.

Keywords : 1. Public Health Nursing Education 2. masters' courses
3. Public Health Nursing Education Model Core Curriculum 4. dementia cafe